

はじめに

大嶽秀夫先生（現同志社女子大学客員教授，京都大学名誉教授）は2013年10月に満70歳を迎えられる。今日では70歳という年齢は，古稀と祝うには早すぎる気がしなくもない。今なお現役の第一線で研究を続けられている大嶽先生の場合，そうした思いは一層強い。しかしながらこれまで先生の教えを受け，今日研究者として禄を食む者たちは，どこかの時点で，1つの節目として先生の学恩に報いたいと常々考えてきた。古稀というのは，その意味ではちょうどよい機会に思える。

大嶽先生は，日本政治が専らジャーナリスティックな話題でしかなかった時代に，それをいち早く学問的対象として捉え，現代日本政治研究の領野を切り開かれた。大嶽先生は幾多の前人未到の領域に分け入り，われわれ後進に研究の道をお示しくくださった。大嶽先生の御業績は，われわれ門下生のみならず，政治学を志す者たちすべてに対して開かれた共有財産となっている。とはいえ大嶽政治学は現在進行形であり，本書では先生のお仕事を回顧的に論じたり，あるいは学説史的に位置づけたりすることは厳に慎んだ。むしろ先生が切り開かれた多岐にわたる現代政治研究のテーマを，各々の関心から今日の文脈のなかで分析することが大嶽先生への精一杯の恩返しであり，大嶽政治学の真の継承につながると考えたからである。本書で取り上げられているテーマは，官僚政治，政治経済体制，議会政治，政治的リーダーシップ，地方政治，比較政治，専門性の政治，ジェンダー政治，防衛政策など，様々である。このようにテーマを並べてみると，今さらながら大嶽政治学の守備範囲の広さに驚かされる。ただし本書では，新左翼研究はカバーできていない。執筆者一同，大嶽先生ご自身による『新左翼の遺産——ニューレフトからポストモダンへ』（東京大学出版会，2007年）の続編を心待ちにしている。

編者は各執筆者に，上記の企画趣意に賛同いただき，それぞれの立場から大嶽政治学の変奏を試みてほしいとお願いした。師弟関係というようなもので徒

党を組むことを嫌う大嶽先生の学風を反映してか、大嶽門下に仲間意識や集団的結束力は乏しく、いかなる意味でも上下関係は存在しないが、出揃った原稿をみれば、各人が私の提案を真摯に受け止めてくれたことがわかる。ひとえに大嶽先生への敬愛の念から生まれた協調性であろう。

本の構成としてはテーマ別に編むことも考えたが、無理に形式美を追求するよりは、大嶽先生に教えを受けた時代が古い者順に論文を並べようということに落ち着いた。唯一の例外は、畠山論文が最後尾に回ったことである。論文の配列はこのように何の工夫もない、いたって単純なものであるが、大嶽先生の「教育遍歴」を知る一助にはなろう。とはいえ、本書で「大嶽門下のそろい踏み」などと早とちりされると困る。諸般の事情により寄稿できなかった門下生の方々がおられる。他方、いわゆる門下生ではないが、大嶽先生の重要な研究テーマを引き継いでおられる方々の寄稿もある。そのような寄稿が本書の研究書としての価値を増すだけでなく、閉鎖的な思考とは無縁であり、広く門戸を開いてこられた先生にふさわしいと考えたからである。

本書のタイトルについても、一言述べておきたい。東北大学助教授であった1984年、大嶽先生は当時指導されていた大学院生たちを動員し（といっても、わずか3名であったが）、『日本政治の争点』（三一書房）なる本を編まれた。その後京都大学に移られてからも、先生は大学院生たちとの共同研究に取り組み、複数の本を刊行されている。大学院生にテーマを与え、論文を書かせ、編著を刊行するというのは、大嶽先生の大学院生指導の大きな特徴であり、成果であったといえる。『日本政治の争点』は、それら一連の成果のなかで最初のものということで、本書のタイトルはそれに因んで『現代日本政治の争点』とさせていただいた。本書には大嶽先生の直接指導は入っていないが、その成果の1つとなっていることを執筆者一同、切に願う次第である。

法律文化社は、本書の企画趣旨を理解し、出版を快諾してくださった。この間、執筆者への対応を一手にお引き受けいただき、望外の寛大さをお示しいただいたのは、編集部の小西英央氏である。記して、深謝したい。

2013年早春

新川 敏光